

正村和也作「おれとあいつの物語 第1章 かくれんぼ」

<前編>

- 今日子(子供) もういいかい。
- 子供1 まあだだよ。
- 今日子 もういいかい。
- 子供2 まあだだよ。
- 今日子 もういいかい。
- 子供(数人) もういいよ。
- 今日子 あ、健ちゃん見つけ。
- 子供1 ちえ、見つかった。
- 今日子 ノンちゃん見つけ。
- 子供2 見つかった。
- 今日子 たっ君見つけ。
- 子供1 みんな、見つかった？
- 今日子 優ちゃんがまだ。
- 子供(数人) え～、また？ 優ちゃ～ん、優ちゃ～ん、優ちゃ～ん。
- 今日子の母 こら、いつまで遊んでるの。もうご飯だよ。いらっしやい。みんなも、もう暗いからおうちにお帰り。
- 今日子 でも優ちゃんが…。
- 母 いいから、早くお帰り。
- 子供(全員) は～い。
- 優次ナレーション 小さいころ、おれはかくれんぼの天才って言われてた。だれも、おれを見つけることはできなかった。あきらめて帰るみんなの後ろ姿を見つめて、一人優越感に浸ってた。でも、なぜか涙があふれてきた。そんな涙を振り切るために、走って家まで帰ったことを今も覚えている。そして、その時心に決めたんだ。
- 優次モノローグ ナレーション おれは、おれはだれにも見つからないぞ。
あの時、何で涙が出てきたんだろう。何であんな決心をしたんだろう。今にして思うと、おれはあの時初めて、だれにも縛られないで、一人でいる“自由の味”を知ったんだ。そして、その陰に隠れた、たまらない“孤独”の味も…
- おれ、遠山優次。大学4年生。周りは、“就職就職”って、青い顔をして騒いでる。でも、おれはあの時のまま。今も、一人隠れ続けている。
- (効果音) (講義終了のチャイムの音)
- 教官 遠山優次、内田道男、両名のはすぐに教官室まで来るように。
(教官室で)

教官 君たち 2 人は、先日行われた就職ガイダンスに出席せず、いまだ就職課に登録もしていない。一体どうなって折るのかね。

優次 就職？ 冗談じゃないですよ。おれ、自由が好きなんです。“自由”、英語で言うと“フリー”、だからおれ、“フリーター”になるんです。

教官 何を訳の分からないことを言っておるのかね。内田のほうはどうなんだ？

内田道男 はい、わたしは卒業しましたら牧師になるため、神学校に行くことに決めています。ですから就職はいたしません。

教官 へえ～。神学校ねえ。まあそれは君の勝手だがね。君は成績も優秀だ。どこの企業に出しても恥ずかしくない。どうだ、2、3 年、いや 1 年でもいい。就職してみては？

道男 いえ、回り道は出来ません。

教官 そうか。しかしね、君たち、我が校の就職率はここ何年ずっと 100 パーセントなんだよ。わたしが就職担当になった今年、2 人も就職しない者が出たら、わたしはどうなると思う？ いいかね、もう一度よく考え直してくれたまえ。分かったね？

2 人 失礼します。

(効果音) (ドアの閉まる音)

(効果音) (キャンパスの中。ガヤ)

優次 お宅、変わってるね。

道男 君だって。

優次 いや、お前には負けてると思うよ。

道男 あの、僕、内田道男といます。よろしく。

優次 知ってるよ。うちの学年で、お前のこと知らないやつはいないよ。

道男 ええ？ どうして？

優次 どうしてって、お前、成績優秀だからな。それに…。

道男 それに？

優次 いや、何でもない。(口ごもる)

道男 ああ、分かった。僕がクリスチャンだから、そうでしょう。

優次 ああ、まあな。だってお前、入学式の日から、校門でビラ配ってただろう。“あなたはイエス・キリストを知ってますか”ってやつ。

(効果音) (音楽ブリッジ 回想)

優次ナレーション おれが道男を初めて見たのは、その入学式の時だった。変わったやつだと思ったが、その穏やかな物腰が妙に印象に残った。おれの持っていない何かをそいつは持っているような気がした。でもそれが何なのか、その時のおれには分からなかった。

道男ナレーション その時の遠山君の印象は、人のうわさで聞いていたものとは違って、明るく、気

さくで、誠実な印象だった。でも、遠山君のひとみの奥は、孤独に満ちていた。とっさに僕はこう聞いた。

- 道男 遠山君。イエス・キリストという人を知っていますか？
- 優次 何だよ、突然。キリストか。まあ、名前だけなら知ってるよ。
- 道男 イエス・キリストは“迷子探し”の名人なんです。
- 優次 “迷子探し”？ 何だそりゃ。唐突なんで何が言いたいのかよく分からないよ。ああそうそう、おれ、子供のころ、“かくれんぼの天才”って言われてたんだ。今、そのイエス・キリストが生きていれば、対決できたのに。残念だな。あ、向こうニダチがいるから、おれ行くわ。じゃあな。(遠ざかる。)
- 道男 あ、あ～遠山君。
- 優次 (遠くで友人に)お～い。
- 友人1 (小声で)あ、優次だ。ヤバいぞ。
- 友人2 そうだな。
- 優次 おい、お前ら、待てよ。どうせ暇なんだろう？ 遊びに行こうぜ。
- 友人1 ダメだよ。
- 友人2 おれたち、優次と違って忙しいんだよ。
- 友人1 そうそう。特に夜は、いつ企業から連絡があるか分からないし、OBからも連絡があるかもしれないし。
- 友人3(女) そうよ、優ちゃんみたいに暇じゃないんだから。それと、今日子も大事な時期なんだから、邪魔しないであげてね。彼女、困ってたわよ。
- 優次 ああ分かった分かった。何だよ、お前ら。ついこの間までと言ってることがずいぶん違うじゃねえか。根性ねえなあ。それから、今日子のことはおれたち二人のことだから、ご心配なく。
- 友人たち (口々に)行こう。
- 優次ナレーション 今日子というのは、小さいころ、一緒にかくれんぼをして遊んだ、幼なじみの植村今日子だった。おれは、手のひらを返したような友人たちの態度が気に入らなかった。そして、去っていく友人たちを見つめて、あの幼いころのことを思い出していた。そしておれは、心に何度も言い聞かせた。
- モノローグ おれは絶対に自由を手にしてみせる。だれにも、何にも縛られずに生きてみせる。
- 優次ナレーション 1週間後、おれは突然今日子に呼び出された。
- (効果音) (喫茶店内)
- 優次 何だよ、こんなに早く呼び出して。
- 今日子 ごめん、優ちゃん。
- 優次 分かった、ディズニーランドに連れてってほしいんだろ。
- 今日子 ううん、違うの。ごめんね、優ちゃん。わたし、もう優ちゃんとは会わない。

優次 何だよ、急に。何でそんなこと言い出すんだよ。

今日子 あのね、優ちゃん。あたし、今とても大事な時期なんだ。だから…。

優次 今日子までそんなこと言うのかよ。…まあいいや。分かったよ。就職決まるまで我慢するよ。頑張れよな。陰ながら応援してるよ。

今日子 優ちゃん。あたしたち幼なじみで、あたし、今まで何となく優ちゃんについてきた。だけど最近、優ちゃんが何を考えてるか分からないの。優ちゃんが将来、何をやりたいのかも分からない。だから不安で…。あたし、これ以上優ちゃんについていけない。ごめんなさい。

優次 今日子、覚えてるか。小さいころ、よくかくれんぼしただろう。おれはいつもだれにも見つからず、一人で隠れ続けていた。

今日子 うん、覚えてる。優ちゃん、いつも最後まで見つからなくて、あたしたち、優ちゃんを残して先に帰った。

優次 おれ、その時ずっと思ってたんだ。お前が見つけに来てくれないかなあって。いや、本当はお前に見つけてほしかったんだ。だから、おれ、お前の来るのをずっと待って、一人で隠れ続けていたんだ。だから今日子、頼むよ。おれの、おれのそばに…。

今日子 (さえぎって) そんな…。そんなこと、いまさら言われても…。

優次 今日子。(肩をつかむ)

今日子 離して これ以上、困らせないでよ、優ちゃん。

優次 頼む！(抱き締め、唇を奪おうとする。)

今日子 離して！

(効果音) (バシッと優次のほおを平手で打つ音。)

優次 (小さく) あっ。

優次ナレーション 痛かった。ほっぺたの痛みと言うより、心が痛かった。22年間生きてきて、最低最悪の日だった。おれは走り去る今日子の背中をぼんやりと眺めていた。その視線の向こうにだれかが立っていた。

モノローグ あいつだ…。

ナレーション それは、何となく煙たい、でもなぜか気になる男、内田道男だった。

<後編>

道男 (明るく) 遠山君！

優次 ん？ ああ、お前。

道男 道男です。内田道男。

優次 ああ、知ってるよ。

道男 ところで遠山君。どうしたの？ 何かあったの？

優次 何かあったって、もしかして見てたの、今の？

道男 ごめん。そんなつもりじゃなかったんだけど、ちょうど通りがかったら、ほんとうにごめん。

優次 いや別に。お前が謝ることじゃない。たださ、かっこ悪いとこ見られちゃったよ。

道男 そうだ、遠山君。これからうちに遊びに来ないか？

優次 ああ…。うん、そうだな。

ナレーション 突然、道男の家に誘われたことには、少し戸惑いを覚えたけれど、今日という一日をどうやってやり過ごそうか途方に暮れていたおれには、そんな道男の親切が素直にうれしかった。そうこうしているうちに、道男の家に着いた。驚いたことに、道男の家は教会だった。でも教会と言っても、普通の家を改造したような、こぢんまりとした建物だった。ここで道男の父親が牧師をしているという。「この親にしてこの子ありか。」おれは、彼の入学式以来の超変わった言動に、何となく納得が行った。道男が礼拝堂だと言った広い部屋には、子供たちが数人いた。近所の子供を時々預かっているようだ。

優次 驚いたな、お前の家が教会だとは。

道男 黙ってごめん。教会だなんて言ったら、遠山君、来ないかと思って。子供たち、うるさい？ ああやって、時々預かっているんだ。

優次 教会ってのも、いろんなことやってんだな。でもまあ、こんなときだからさ、にぎやかでいいよ。

ナレーション 礼拝堂のほうからは、子供たちのにぎやかな声が聞こえてきた。そして、牧師である道男の父親が、子供たちに話をしている声も聞こえてきた。

(効果音) (以下子供の声、遠くで。)

子供 1 先生、お話してえ。

子供たち お話してえ。

内田牧師 はあい。じゃあ、みんな注目。

子供たち わ～い。

内田牧師 ある日、イエス様は、100匹の羊さんたちを、おいしい草がいっぱい生えている、広い広い草原に連れて行ってあげました。

子供 1 え～、草原！ いいな～、いいな～、僕も行きたい。

子供 2 あたしも行きたい。

子供 3 僕も連れてって。

子供 1 シー！

内田牧師 そして、草原に着くと、羊さんたちは、みんな仲良く、夢中でご飯を食べたり、お水を飲んだり、おしゃべりしたり、お昼寝したりしていました。ところが、ある一匹の羊さんが、「ああ、おいしい草がいっぱいだ。でも、こんなに広い草原だ。もっとおいしい草があるかもしれない。よし、探しに行こう！」と言って、イエス様の群れから離れて一人でどんどん遠くのほうへ行ってしまう。しばらくして、

その羊さんが辺りを見回すと、仲間の羊さんはどこにも見当たりません。帰る道も分からなくなってしまい、とうとう迷子になってしまいました。辺りはだんだん暗くなってきました。迷子の羊さんは寂しくて、怖くて、わあわあ泣き出してしまいました。「イエス様、イエス様、僕、迷子になっちゃった。助けて、イエス様」と、迷子の羊さんは夢中でイエス様に助けを求めました。さあ、迷子の羊さんは無事におうちに帰れるでしょうか？

子供 1 先生、続きは？ ねえ、どうなっちゃうの？

子供 2 早く、早く続き聞かせてよ。

優次ナレーション 聞くとともに聞いていたおれは、この時、子供たちと同じ気持ちになって、牧師の話の結論を待っていた。

内田牧師 はあい。すると、大声で泣いている羊さんの頭を、だれかが優しくなでました。羊さんがびっくりして顔を上げると、イエス様が立っていました。そうです、何とイエスさまは、あとの 99 匹の羊さんを残して、1 匹の迷子の羊さんを捜しに来てくれたのです。そしてイエス様は、迷子の羊さんを優しく抱き上げて、「どうして泣いているんだい？ わたしはここにいるよ。もう大丈夫。これからは、一人で遠くに行ってはダメだよ。さあ、一緒にみんなのところに帰ろうね。」と言われました。そして 100 匹の羊さんたちはみんな、無事におうちに帰ることができました。イエス様は目には見えないけど、みんなが「独りぼっちで寂しいなあ」って思うときでも、いつも一緒にいてくれるんだよ。

子供 1 ふうん。

子供 2 よかった。

内田牧師 でも、みんなも、広～いところに行ったときには、迷子になっちゃうから、一人では遠くに行かないようにね。守れる人、はーい？

子供たち (口々に)は い。

道男ナレーション 遠山君は、父の話が終わると、きつとした顔をして、突然立ち上がり、父のいる礼拝堂に入っていった。

優次 あ、すみません。

道男 倒産。同じ大学の遠山君。遠山優次君。

内田牧師 いやー、よくいらっしやいました。いつも息子がお世話になってます。

優次 いえ、僕は何も…。ところで、あ、今のお話で質問したいことがあるんですけど。

内田牧師 はい、どんなことでしょうか。

優次 あ、イエスという人は、なぜ 99 匹を残して、たった 1 匹の羊を捜しに行ったのですか？ そんなの不合理じゃないですか。ちょっと納得が行かないんですけど。

内田牧師 なるほど。わかりますよ。わたしもかつてはそう思っていました。それはですね、こう

